

八月

午前九時、日の光が強い。気温はもうずいぶん上がっている。

女は改札の外で待っている。濃い影の中にいて、壁に背を預けている。壁は花模様のタイルで覆われている。

女は一瞬笑みを見せて、すぐに退屈そうな顔に戻る。青い光が溢れる出口に向かう。

タクシーは椰子の葉の陰と木漏れ日の間を縫って進みはじめる。女は日の光に手をかざし、窓を眺め、まるで一人で乗っているような様子でいる。タクシーは海岸沿いの道に出る。まっすぐな海岸

そうして女は富くじを一枚手に入れる。タクシーに乗り込んで、ドアを閉め、手の中の紙きれを見つめる。ふちは緑色で、湖と古城の写真が印刷されている。

タクシーはふたたび進みはじめる。揺れて、角を曲がる。女は紙きれを裏返す。同じように見つめる。

ホテルの部屋に入ると、女はカーテンを振り払うように開き、窓を開け放つ。青い水平線が見える。女は日の当たるバルコニーに出る。そこから静かな入り江と砂浜が見下ろせるだろう。

女はすぐに部屋の中に戻り、まるで一人で過ごしているようにベッドに寝転がる。うつぶせになって、枕の上で富くじを眺める。ずっと手に持つ

線に沿って行く。陰るところのない明るい道を行く。女は顔を窓に突き合わせている。窓の向こうには青く輝く海がある。タクシーは進むが、海の眺めは変わらない。女の表情はうかがえない。

突然タクシーが揺れて、木陰に入る。海が去っていく。木立のあいだを抜ける。白い建物と赤い広告看板が通り過ぎる。

停めて。

女が声を出す。顔は窓に向けたままだ。タクシーが止まる。女はドアを開け、ワンピースの裾を蹴って外に出る。手で髪を抑え、あれが欲しいと言う。富くじの売店を指差す。

ていたのだろう。

こんなにしよつちゆう出張なんて、疑われない？
女は歌の切れ端でも口ずさむように、節をつけて言う。

もう気づかれてるんだっけ。

女は泳ぐように脚を動かして仰向けになる。両手を掲げて、富くじを窓に透かすようにして眺める。

当たるかな。

女は言う。

当たるわけないよね。

女はあくび混じりで言う。それから、富くじが当たったら旅行にいきたいのと言う。女はゆっくり語る。飛行機で雪の積もった空港に降りる。

あるいはらくだに乗って砂漠を横切る。あるいは象に乗ってジャングルを抜ける。見知らぬ人ばかりの街で地下鉄を待つ。

どこか、ずっと遠いところに。

小さな声で、女は言う。

女はもう一度泳ぐように脚を動かし、うつぶせになる。

光のシートの上で水を蹴って、水平線の方へほんの少しだけ近づき、穏やかな波の上に頭を出している。

そろそろ昼食時だったが、女は泳ぎたがったのだった。

女は漂う。今は富くじを手持っていない。砂浜に置いて、サンダルで重しをしている。

女は海に浮かんで、水平線を眺めている。振り返り、浜に顔を向ける。大きなゴーグルを着けている。シュノーケルをくわえている。表情はうかがえない。

女は少し沖に出て、潜る。浮かび上がる。潜る。浮かび上がる。腕を掲げる。細い腕が光る。水平線は大きな弧を描く。空は光る。空の高いところを鳥が飛ぶ。

沈んだヨットを見つけたの。

女は赤いスプーンにスプーンを入れる。スプーンは小さな貝を拾い上げる。女は海の中でヨットを見つけたのだと言う。貝の身を食べ、殻を受け皿

に出し、ナプキンで指を拭う。水のグラスの横に視線を落とす。富くじが置かれている。

カフェのテラスはほとんどひさしの陰に入っている。丸い小さなテーブルの端に強い光がかかっている。女が置いた富くじの外側だ。

女は富くじに視線を落としたままスプーンにスプーンを沈める。ヨットのまわりには小さな魚が泳いでいたのだと言う。

女は小えびのオイル煮とパンを欲しがらる。少し泳いで腹を空かせたのだろう。それらのあとに、女はシャベットを欲しがらる。

日差しを避けてホテルの部屋に戻る。女は昼食の前にシャワーを浴びたが、まだ髪に海水のにおいが残っている。枕の上に髪が広がる。滑らかな

肌を小刻みに震わせる。シートを掴む。ひっぱる。そのあとで少女のように少し泣き、シートの描く複雑な模様の間で眠る。凧いだ海のような腹部は緩やかに上下する。

やがて女は目を覚まし、ヨットハーバーに行きたがる。長い昼下がりはその終ろうとしているが、まだ太陽がいっぱいだ。

ヨットハーバーの管理事務所で、女は帽子を取る。事務所にいるのは半世紀前には若かった男だ。白い髪を後ろに流し、日に焼けた肌、深い皺、光の矢を射る目。それらは年月の悲しみと尽きせぬ情熱の物語を暗黙のうちに語る。

老人は口を開き、少し考える。言葉を出す。ついこの間だ。去年、いや、一昨年。

老人は言う。ヨットが沈んだことは把握しているのだそうだ。

引き上げる者など、いやせんよ。

問わず語りに男は続ける。

持ち主はどこにもおらんのだから。

かつて若かったその男の語るところによると、そのヨットはある金持ちの息子のものであったのだそうだ。金持ちの息子は放蕩にふけていた。放蕩が過ぎて、ヨットの上で貧しい友人に殺された。友人は金持ちの息子に成り代わろうとして、それははじめうまく行った。だがじきに気づかれ、友人もまた殺された。ヨットは金持ちの息子が死んだ場所で手向けとして沈められた。

取るに足らん話だ。

老人は言う。

私があつたヨットを引き上げるわ。

女は言う。骨付きのラム肉をフォークでつつく。ワインを透かした暗い光が富くじを染める。女はあまり食べない。ヨットを引き上げるのに必要な機材や人員、費用について語る。小さく声に出すが、一人で思案するようでもある。同じ調子で、ヨットのマストを掴んで見上げた海面の光の様子を語る。

女は部屋の明かりを灯さない。ワンピースを足元に落とす。ベッドの端に座る。横のテーブルに、クリスタルの灰皿が置かれている。女はその下に

富くじを挟み込む。顔を上げて窓を見る。空にはかすかな光が残っている。

富くじが当たったらその金でヨットを引き上げるのだと女は語る。

枕の端を掴みながら、女は語る。そのヨットで、遠くまで航海するのだと。何日も、何か月もかけて、いくつも夕日を見送り、イルカと併走する。ときにはスコールに打たれ、またあるときには見た渡す限りなにもない海を、静かに進むのだと。どこまでも、遠くまで。

そのときは、あなたを奥さんに返してあげる。

朝、女はいない。レースのカーテンが部屋の内

側に大きく膨らむ。テーブルの上から灰が飛び散る。テーブルにはクリスタルの灰皿が置かれている。灰はほとんど飛ばされ、端の焦げた緑色の小さな三角形が残っている。

バルコニーから静かな砂浜が見える。静かな入り江が見える。静かな海で、だれかが細い腕を振る。シユノーケルと大きなゴーグルを着けただけかは、すばやく潜る。